



**公認スポーツ指導者  
全国研修会**

テーマ『動きはじめたスポーツ』

12/18(日) 東京ホテルニューオータニ

**【特別講演】  
「ゴルフの過去と未来」倉本昌弘**

特別講演

演題 **ゴルフの過去と未来**

くらもと まさひろ  
**倉本 昌弘**

プロゴルファー、ジャパンゴルフツアー機構選手会理事



**倉本昌弘**

- ◆ 1955年広島県生まれ
- ◆ 大学出身のプロとして初の永久シード権を持つ
- ◆ '06~'08年には米ツアーに挑戦
- ◆ 経験から得たことを日本のゴルフ界へ持ち込み、組織と制度の改革の旗頭となり、日本プロゴルフ協会から日本ゴルフツアー機構を立ち上げた
- ◆ スキーの指導者資格も持つ
- ◆ 子ども向けのスナッグゴルフ、一般向けのブリジストンゴルフアカデミーへの関わりも持つ

**米ツアーから学んだこと**

- ◆ 「ゴルフ」とはどんなスポーツか？
- ◆ 「審判がないから自分に正直な」
- ◆ 「広大な自然を独り占めする」
- ◆ それゆえ、自然に対し、同組の仲間に対し、次の組の相手に対し、「感謝と思いやり」を忘れてはならない

## 米ツアーから学んだこと

- ◆ 「地域貢献」の意味
  - ◆ ボランティアはお金を払ってでもするもの。自分と社会との接点
  - ◆ ボランティアをすることで社会から認められた存在になる
  - ◆ 経験年数によって、駐車場→会場→クラブハウスといった選手に近づける存在になる。選手はそれを知っているので、ボランティアスタッフを決して卑下しない。(罰則がある。)
  - ◆ 地域や企業がツアーを招致することに積極的である。NPOとして立ち上げ、企業が出資することで免税措置が、ボランティアが支えることで人も育ち、地域・企業・人、関わるもの全てがウィンウィンの関係になる

## スキーから学んだこと

- ◆ 「指導する」とは
  - ◆ 「細切れ指導」と「流れの指導」。
  - ◆ 日本のスキー教室は1つ1つの動作を確認しながら進む。海外では上から下まで滑ることで進む。それが「スキー」であるから。翻ってゴルフに当てはめると練習場でのレッスンは「細切れ」で、コースでのレッスンは「流れ」で行うべきではないか。
  - ◆ 受講生はお客様である。ストックで位置を示したり、手袋をしたまま指示することはしない。それは教える者の礼儀である。

## 現在の活動①

- ◆ 小学生、ジュニアへのアプローチ
  - ◆ スタンスは「(ゴルフは大人のスポーツであり)いずれゴルフへ足が向けばよい」。子どもたちに臨むことは「スポーツをしよう！」
    - ◆ 屋外で、芝生の上で、マナーを身につけ、ルールを守って
  - ◆ 「スナッグゴルフ」の普及活動
    - ◆ 広島市の全ての小学校にスナッグゴルフセット配布をめざす
    - ◆ 配布する学校には、毎回2時間の講習をご自身が出向く
    - ◆ 購入費用は個人的、一時的にならない方策で行う
  - ◆ 「支援自動販売機」設置の陳情
    - ◆ 設置に協力してくれる地元の商店を廻る活動を普及活動と位置づけ
    - ◆ 売上金の一部を充てている。
  - ◆ 小学生に芝生体験
    - ◆ 「芝生の上でスポーツをしよう」などを企画してもらおう試み
    - ◆ 広大な土地、芝生を独占する感謝の気持ちの表れとして、
    - ◆ 広島カープ(野球)、サンフレッチェ広島(サッカー)、湧永製菓(ハンドボール)と連携して

## 現在の活動②

- ◆ ブリジストンゴルフアカデミー(ゴルフスクール)
  - ◆ 指導者によって異なる指導にならないため
  - ◆ 「受講者のための教本」の他に「教本を教えるための教本」づくりを提案。
  - ◆ 用語・言葉の統一、個人カルテを導入
  - ◆ その人のめざすゴルフライフに応じた指導を行うための継続的、系統的な指導の確立
  - ◆ 同じ指導法によるアカデミーの全国展開による人口増大、また驚異的な継続率を実現

### 現在の活動③

- ◆ クオリファイメントーナメント(QT)
  - ◆ プロゴルフツアーにおいてツアー本戦へのシード権を持たないプロゴルファーがシード権を得るために参加する予選会でプロとしての自覚を促すためのガイダンスを実施
  - ◆ 企業がどのようにしてスポンサーになるのか、
  - ◆ ボランティアスタッフはどう集められ教育を受けているのか
  - ◆ 取材時の対応法などの受講

### これからのこと

- ◆ ゴルフをスポーツとして認知してもらいたい
- ◆ 2016年リオデジャネイロ五輪で正式種目として復活するのを機に
- ◆ 「接待」の手段ではなくスポーツとして認められる存在になりたい
- ◆ 全てのゴルファーが施設利用時に払っている税金をスポーツ界へ還元したい

### 【対談】

#### 「スポーツ基本法の制定とスポーツ界の動き」

- ◆ ヨーコ・ゼッターランド
  - ◆ 1969年米国生まれ。中学バレーで全国優勝、高校ではアジアジュニアで日本代表として優勝。早稲田大学卒業後、米国ナショナルチームの一員としてバルセロナ五輪で銅メダル。その後、日本の各種スポーツ団体の理事を務める。
- ◆ 間野義之
  - ◆ 1963年神奈川県生まれ。早稲田大学スポーツ科学学術院教授  
専門はスポーツ政策論



### 体験から語るスポーツ基本法

- ◆ 高齢化社会だからこそ  
スポーツの指導に携わっている高齢者は「孤立感」を感じる事が少ない。
- ◆ トップアスリートの役割  
メディアへの露出が多い＝社会の良きロールモデルである。その振る舞い、言動がそのスポーツのイメージをつくる。普及活動では「本物を見せる」。手加減はしても手は抜かない。本物に触れる機会を最大限活用したい。

## これからの日本のスポーツ

- ◆ 競技者の縦と横の循環を  
縦循環＝初心者→上級者→トップアスリート→初心者  
の指導者→トップの指導者  
横循環＝(選手)地域→県大会→全国大会→アジア→世界→(指導)地域の指導→・・・
- ◆ 競技間での連携  
国立科学スポーツセンター (JISS) の設置により、他競技団体が同時に合宿を行うことが可能になった。選手同士の連携以上に指導者の情報交換手段として、すでに効果が出始めている。

## 【シンポジウム】

### 「スポーツと復興支援 -スポーツにできること-」

- ◆ コーディネーター：
  - ◆ 宮嶋泰子  
テレビ朝日ディレクター兼アナウンサー
- ◆ シンポジスト：
  - ◆ 川本和久  
福島大学陸上競技部監督、福島大学教授
  - ◆ 高橋善幸  
釜石シーウェイブスRFC ゼネラルマネージャー
  - ◆ 松村善行  
石巻スポーツ復興サポートセンター理事長

## スポーツによるつながり

- ◆ 圧倒的なスピード感がある
- ◆ 行政を通して進まないことも、スポーツを通じての支援はすぐに実現する
- ◆ 「同じ競技をしている」という他地域からの支援、「応援してもらっている恩返し」という地域内での支援、さまざまな支援が迅速に行われた

## 何でも役に立つ

- ◆ 「逆に迷惑になっているのでは？」という心配は無用
- ◆ 経験したことがない出来事であり、起こしてくれた行動に対して責める者はいない
- ◆ 支援してもらった側は「責めない」、支援する側は「考えない」

## 感情を取り戻せる手段

- ◆ 事態の収束に伴い、様々なものが元に戻っていく。ただし感情だけは無理をしてしまう
- ◆ 押さえつけられた感情を無理なく取り戻せるのが「スポーツ」である
- ◆ 被災していない総合型地域スポーツクラブからの「子どもの遊び相手ボランティア」の存在は非常にありがたかった